

ダハシュール～マズゲーナ

矢澤 健*

1. 遺跡のエジプト学的特質

ダハシュールはカイロから南に約25kmのナイル川西岸にあり、マズゲーナはそのすぐ南に位置している。ダハシュールからマズゲーナは、メンフィス・ネクロポリスの中では最も南にある墓域である。

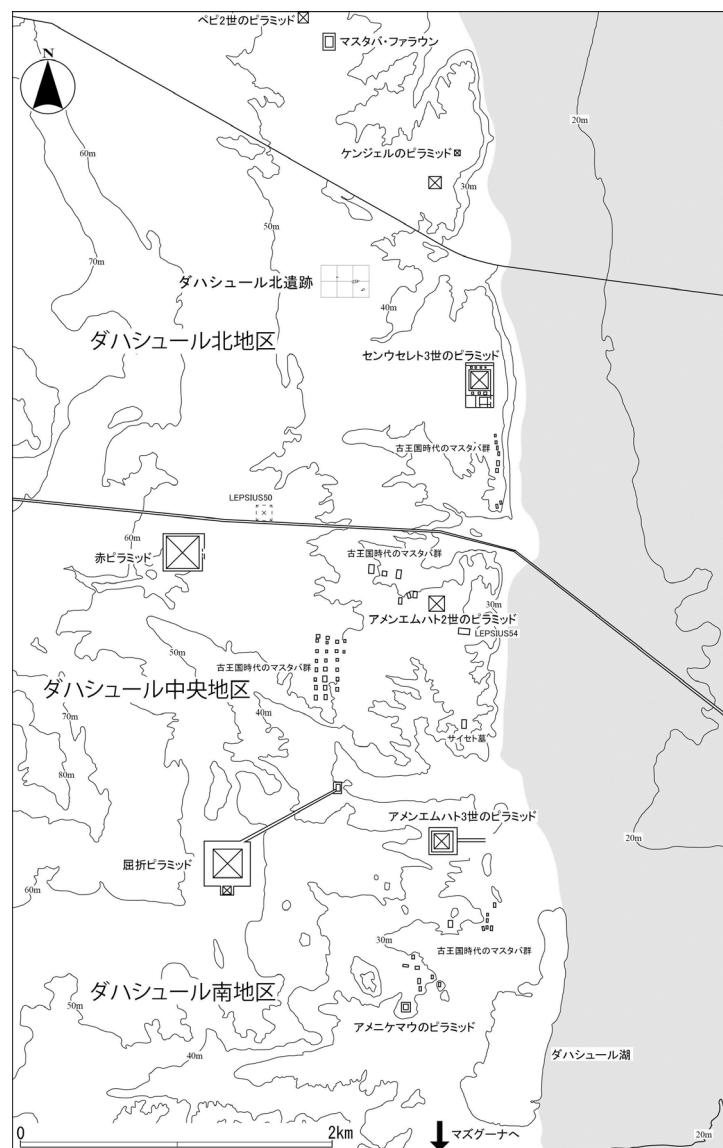


Fig.1 ダハシュール周辺図

* 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

ダハシュール地域は主に北、中央、南の3地区に分けられている (Fig. 1, cf. Alexanian 1999: Abb.1)。北地区の耕地際には、中王国時代第12王朝のセンウセルト3世のピラミッド複合体が立地しており、周囲には同時代の高官墓が確認されている。そして西側の緩やかな丘陵上には、早稲田大学古代エジプト調査隊が発見したダハシュール北遺跡があり、新王国時代のトゥーム・チャペルやシャフト墓、土壙墓群、中王国時代のシャフト墓群が発見された¹⁾。

中央地区の西側には、第4王朝スネフェル王の2つの石造のピラミッドがあり、北側は通称「赤ピラミッド」、南側が「屈折ピラミッド」と呼ばれている。赤いピラミッドの東側には古王国時代のマスタバ墓群が整然と並んでおり、さらに東の耕地際には第12王朝のアメンエムハト2世と3世のピラミッドが並んでいる。

南地区には、ダハシュール湖のすぐ西側に古王国時代のマスタバ墓群が発見されており (Stadelmann and Alexanian 1998: 299-306; Alexanian and Seidlmayer 2002: 3-19)、その周囲にも墓域が発展している。また、中王国時代第13王朝のアメニケマウ王のピラミッド (Maragioglio and Rinaldi 1968) や、被葬者不明のピラミッド群²⁾ も発見された。

その更に南には、マズグーナと呼ばれる地域があり、中王国時代の2つの未完成のピラミッドが並んでいる。これらは第12王朝のアメンエムハト4世とセベクネフェルのピラミッドと推測されている³⁾。

このように、ダハシュールからマズグーナにかけての地域は、ダハシュール北遺跡を除くとほとんどが古王国時代、中王国時代のピラミッドを中心として発展した墓域と言える。第4王朝のスネフェル王の石造の屈折ピラミッド、赤ピラミッドはギザの三大ピラミッドへと続く重要な発展過程を示しており、一方で中王国時代のセンウセルト3世、アメンエムハト3世の日乾煉瓦造りのピラミッドも建設されていることから、ピラミッド史を語る上でも重要な遺跡と言えよう。

またダハシュールおよびマズグーナは、サッカラのように古代エジプトの王朝開始から終焉に至る長い期間に渡って繰り返し利用された重層的な遺跡ではなく、古王国時代と中王国時代に集中的に使用され、その後は大規模な建築活動が認められていない。こうしたことから、ピラミッドに付属する葬祭殿、河岸神殿、参道や周囲の高官墓などが良好な保存状態で残されており、当時の王を中心とする葬祭活動の様子やその発展過程、王を中心とする古代エジプト社会の復元研究においても、第一級の遺跡となっている。

さらに、ダハシュールは遺跡景観の上でもメンフィス・ネクロポリスの中で際立った場所である。ミンシャート・ダハシュールと呼ばれる町がこの地域の緑地帯にあるが、ギザのように都市が低位砂漠の縁辺まで広がっていることはなく、耕地際には緑が広がっている。とりわけダハシュール湖周辺は、近年まで水をたたえており、水鳥が集い、古代の景観を良くとどめていたと考えられている。湖周辺は現在も草が生い茂っており、開発や植林などは大々的に行われている様子はない。こうした景観は、ギザ、アブ・シール、サッカラなどでは失われて久しく、ダハシュール地域が持つ稀有な特徴の1つと言えるだろう。

2. 遺跡の現状と問題点

ダハシュールからマズグーナに至る広大なネクロポリスの中で、公開されている地域はごく一部に過ぎない。遺跡整備の現状や問題点についても、公開されているか否かによって状況が異なってくる。こうした理由から以下では、遺跡整備の現状と問題点について、(1) 公開の対象となっている遺跡の現状、(2) 非公開の遺跡の現状、の2つに分けてまず説明し、その後特に大きな問題となっている(3) 遺跡に対する脅威と盗掘被害について述べていく。

(1) 公開の対象となっている遺跡の現状

現在ダハシュールで公開の対象となっているのは、古王国時代第4王朝スネフェル王の赤ピラミッドと屈折ピラミッドのみとなっている。遺跡へのアクセスは赤ピラミッドの北端から約130m北を東西に走っている道路を使用しており、この道路を東へ行くと、この地域の主要な街であるミンシャート・ダハシュールに続いている。道路の西側は軍事エリアに繋がっており、赤ピラミッド正面付近から400m西には軍事エリアの境界が築かれている。この道路沿いの、緑地と砂漠の境界付近に、ダハシュールのチケット・オフィスが設けられている。

赤ピラミッドと屈折ピラミッドの間は約1.9kmあり、舗装された道路が西側を走っているため、屈折ピラミッドまでは車でアクセスすることができる。赤ピラミッド北西側、屈折ピラミッド北西側に駐車場が設けられていた。屋内の休憩所はないが、東屋があり（Fig.2）、赤ピラミッド付近にはトイレも設置されていた。2011年8月の時点では、腰を下ろすことができる椅子などの設備が整えられていなかった。

ピラミッド内部を見学できるのは赤ピラミッドのみであり、入口はピラミッド北面の中腹にある。ピラミッド北面下部に堆積している土砂の上面に階段が作られており、土砂の最上部から入口までの間はピラミッドの石材の上に階段が作られ、手すりを取り付けられていた。入口より上は、建材の落下を防ぐためなのか、足場のようなものが築かれていた（Fig.3）。入口から前室までの長さ約63mの下降通路には金属製の足かけが取り付けられた木製の板が敷かれており、両方の壁には木製の手すり取り付けられている。内部の壁にはところどころに亀裂が走っており、亀裂の方向に直交する形で長方形の石膏の塊を接着し、石膏の表面には日付を記載し、亀裂の進行状況をモニタリングする仕組みが取り入れられていた（Fig.4）。

赤ピラミッド、屈折ピラミッドの東側からは礼拝施設が発見されており、どちらの例もこの部分の土砂が取り除かれ、古代の日乾レンガの壁体を現代の日乾レンガで覆い、平面プランが分かる形で保護が行われていた。しかし保護は十分ではなく、屈折ピラミッドの例では壁体が崩れ、風雨にさらされていた（Fig.5）。



Fig.2 屈折ピラミッド北西側にある
駐車場に隣接する東屋 2011年8月19日



Fig.3 赤ピラミッド北側 2011年8月19日



Fig.4 赤ピラミッド内部の亀裂に接着された石膏
2011年8月19日



Fig.5 屈折ピラミッドの礼拝施設 2011年8月19日

また、屈折ピラミッドの北東部から参道が伸びており、「河岸神殿」と考えられていた建造物に繋がっている。この建造物は耕地際まで下る道筋の中間に位置しており、近年では建造物からさらに東へ伸びる第2の参道が発見されている (Alexanian et al. 2010: 3-7)。しかし、観光客がこれらのピラミッド複合体の存在を遺跡において認識できるような整備はなされていない。

2005年から2006年には、シュタデルマンらによって屈折ピラミッドとその「河岸神殿」に対する保存修復作業や、赤ピラミッドのキャップストーンに対する再度の修復作業が実施されている (Stadelmann 2006)。ダハシュールおよびマズグーナには遺跡に隣接する博物館はなく、この地域の遺跡から発見された遺物を見るためにはカイロのエジプト考古学博物館まで行かなければならないという状況がある。

公開されている遺跡においても、遺跡を説明するための看板はほとんどなく、観光客はあらかじめガイドブックを購入しておくか、あるいはガイドを雇っておかないと、遺跡に対する十分な理解を得られないだろう。

(2) 非公開の遺跡の現状

古王国時代の2基のピラミッド以外にも、ダハシュールおよびマズグーナには数多くのピラミッド、墓が確認されているが、現在一般の観光客がアクセスできる状況ではない。そのため、アクセスのための道や休憩所、トイレなどは一切用意されておらず、遺跡の保護や警備なども十分な対策は行われていない。

ダハシュールの北地区は早稲田大学の調査隊が発見したダハシュール北遺跡と、アメリカ・メトロポリタン美術館が調査を継続しているセンウセルト3世のピラミッド複合体、および周辺の高官墓などがある。ダハシュール北遺跡は新王国時代のトゥーム・チャペルと、中王国時代・新王国時代のシャフト墓、土壙墓によって構成される遺跡であり、ほとんどの遺構は地下にある。地上のトゥーム・チャペルは基礎の盛土と日乾レンガまたは石灰岩による壁体の最下部や石敷きが残っているのみで、上部構造のほとんどは失われている。現在は、盛土や原位置をとどめている壁体を現代の石灰岩ブロックで囲い、石敷きなどには木製の覆いを設置するなどして保護する作業が行われている。積極的に公開するための整備ではないが、現状を維持するための対策が講じられている。センウセルト3世のピラミッド複合体とその周辺は、ダハシュールの非公開の遺跡の中では例外的に保存整備が進んでいる。センウセルト3世の日乾レンガによるピラミッドの崩落を防ぐための保護や、ピラミッド複合体内の建造物の残存している壁体を、石灰岩の断片を周囲に積み上げて保護している様子が見受けられた。またピラミッド複合体周壁の外表面と内面のおおよそのラインに石灰岩の剥片を並べており、

南東コーナーは石灰岩の建材と日乾煉瓦を利用して部分的な復元が実施されている。また、ピラミッドの北側にある高官のマスタバの上部構造が復元されている。

ダハシュールの中央地区には非公開の重要な遺跡が数多くある。耕地際にはアメンエムハト2世の石造のピラミッド、アメンエムハト3世の日乾レンガによる「黒いピラミッド」に加え、アメンエムハト2世時代の高官サイセト（シエシ）の墓などが残っており、これらの遺構の周囲には同時代のマスタバやシャフト墓が数多く存在することが分かっている。アメンエムハト2世のピラミッドは1894年から1895年にかけてド・モルガンによる発掘が行われたが（Morgan 1903: 28-37）、発掘は一部に限定されており、ピラミッド複合体の全体像は未だ不鮮明である。ピラミッドの北側一帯には古王国時代、中王国時代のシャフト墓群も広がっており、近年ドイツ考古学研究所による調査が継続されている。アメンエムハト2世のピラミッドの南には第13王朝のピラミッドとされている遺構（Lepsius 54）があり（Arnold and Stadelmann 1975: 174, Taf.112b）、このピラミッド周辺の堆積は周囲よりやや高く、石灰岩チップを多く含んでおり、明らかに遺構・遺物を包含していると考えられる。そのすぐ南には耕地際から軍事エリアまで東西に帯状に伸びる道のような跡があり、この部分だけ若干標高が周囲より低くなっている。この道沿いには赤と白が交互に塗られたポールが間隔を空けて建てられていた。これは1975年に石油のパイプラインを通した跡のようである（Lehner 1997: 184）。パイプライン跡はピラミッド周辺の堆積の南側を切る形で作られており、敷設には遺跡の破壊を伴っていたことは明らかである（Fig.6）。



Fig.6 アメンエムハト2世のピラミッドの南にあるパイプライン敷設跡 2010年9月11日

宰相サイセトの墓はド・モルガンによって発見されており（Morgan 1903: 78-86）、玄室にはピラミッド・テキストが刻まれていたことが分かっている。この墓は2006年にエジプト考古学研究所の調査隊によって再調査が行われた。2010年9月11日現在は地下の玄室の入口に扉が取り付けられ、鍵がかけられており、入口へと続く斜路には木製の板材による床が作られていた。内部は確認できなかったが、それ以外の整備は特に行われていない様子もなく、遺跡の管理人も常駐していなかった。

アメンエムハト3世のピラミッド複合体はド・モルガンによって調査が行われ、アメンエムハト3世だけでなく、第13王朝のアウイブラー・ホル王の埋葬やヌブヘテプ・ケレドの埋葬が未盗掘で発見された（Morgan 1895: 87-117）。その後、Di. アーノルドを中心とする全体的な調査が実施されたことで、ピラミッド複合体の全容が明らかになった（Arnold 1987）。また、ピラミッドのキャップストーンがほぼ完形の状態で発見されており、現在カイロのエジプト考古学博物館に展示されている。しかし、現段階では遺跡の整備が進められていない様子は認められなかった。

また、砂漠側に留まらず、耕地側からも遺跡が確認されている。赤ピラミッドの東に当たる耕地ではピラミッド・タウンと考えられる遺跡の存在が指摘されており、ドイツ考古学研究所によるボーリング調査によって少なくとも200m x 130mの範囲に渡ることが確認されている（Alexanian and Seidlmayer 2002: 19-27）。

ダハシュールの南地区は、古王国時代、中王国時代の墓域が広がっているが、ダハシュールの北地区、中央地区に比べると、調査が進んでいない地域と言えるだろう。近年では、N. アレクザニアン、S.J. ザイドルマイ

ヤーらによって古王国時代のマスタバを中心に発掘調査が行われた (Alexanian and Seidlmayer 2002:1-19)。また、中王国時代末のピラミッドや墓を対象とした分布調査が行われている (Schiestle 2006, 2008a, 2008b)。

南地区は遺跡としての重要性が高いとは認識されていないためか、遺跡に常駐している管理人もおらず、警備が手薄になっている。こうした状況が、後述するような深刻な盗掘被害を招いていると考えられる。しかし、南地区はメンフィス・ネクロポリスの南限の地域であり、アメンエムハト王を初めとする中王国時代第13王朝のピラミッド群も立地している。第13王朝の王や編年、当時のメンフィス地域の様相については不明な点が多く、南地区の調査によって問題を解決する手掛かりを得ることが期待できるため、より積極的な調査・研究が求められる。

また、衛星リモートセンシングデータによる調査で、ダハシュール湖周辺には明らかに人工物と考えられる約1kmの溝状の遺構や、南北約500m、東西約190mの方形構造などが発見されており、緑地側にも遺構の存在が指摘されている (恵多谷 2011: 72-73, 76-77)。

マズグーナには2基の未完成のピラミッドが発見されており、中王国時代第12王朝再末期の王アメンエムハト4世とセベクネフェルが被葬者だと推測されている。20世紀初頭のW.M.F. ピートリらの発掘調査 (Petrie 1912) 以降、調査は実施されておらず、ピラミッド周辺の様相は明らかになっていない。ピラミッドは上部構造がほとんど残っておらず、地上からは遺跡として認識することすら難しい状況である。遺跡としての存在が明示されていないためか、マズグーナの北のピラミッドには現代の墓地が造営されてしまっており、深刻な遺跡破壊を招いてしまっているのが現状である (第2章 Fig.7 に写真を掲載)。

(3) 遺跡に対する脅威と盗掘被害

ダハシュールからマズグーナにかけての地域で遺跡に対する脅威となっているのは、まず墓地の造営が挙げられる。アメンエムハト3世のピラミッド北側にある谷状に低くなった箇所には、耕地際から現代の墓地が広がっている。2012年末から銃で武装した近隣住民らが重機を用いてこの墓地を拡大する工事を許可なく実施しており、2013年1月に報じられた⁴⁾。警察も介入することができず、墓地の造営に伴う遺跡の破壊や盗掘活動が行われていると報告されており、早急な解決が求められている。また、マズグーナの北のピラミッド付近では、かつてピラミッドがあった場所に現代の墓地が建設されてしまっている。もっともマズグーナのものに関しては近年作られたものではなく、衛星画像で確認できる限りでは、2004年にはすでに作られていたことが分かる。

また、軍隊、石油会社関連の活動も遺跡に対する脅威となり得る。ダハシュール北地区には石油会社による工場が建設されている (Fig.7)。工場はセンウセレット3世のピラミッド複合体のすぐ南に位置しており、付近にはマスタバ墓が並んでいたことから、工場の建設には遺跡の破壊を伴っていた可能性が高い。またパイプラインが西に向かって伸びており、近年でも工事が行われている。また工場のタンクや煙突などの施設は遺跡景観を著しく害するものである。

現在、遺跡に対して最も深刻な被害を与えているの



Fig.7 ダハシュール北地区にある石油会社の施設
2010年10月12日

は、盗掘である。2011年1月以降に起こったムバラク政権崩壊の影響で治安が悪化しており、エジプト各地で盗掘の被害が発生している。警察も新政権への移行の過程で組織が安定しておらず、盗掘に対する十分な対策が行われていない状況に陥っている。ダハシュールは特に盗掘が横行している地域と言え、衛星画像からも被害の様子を確認することができる（詳細は第2章を参照）。ダハシュール北地区ではセンウセト3世のピラミッド複合体周辺や早稲田大学が調査を行っているダハシュール北遺跡で盗掘の被害が確認されている。ダハシュール中央地区ではアメンエムハト2世のピラミッド複合体の北側、アメンエムハト2世時代の高官サイセト墓の周辺、前述のアメンエムハト3世のピラミッド北側で盗掘が行われている。ダハシュール南地区のアメンエムハト3世のピラミッドの南側にあたる地域は、報道はされないものの最も盗掘が進んでいる様子であり、2012年9月12日の衛星写真では東西約600m、南北約300mの広い範囲に渡って盗掘された痕跡が見受けられた。またアメンケマウ王のピラミッドの北、古王国時代のイピのmastabaの周辺などでも盗掘が行われていた様子である。

こうした盗掘活動の原因は、遺跡の警備の不備が第1に挙げられる。ダハシュール地区では公開されているスネフェル王の2基のピラミッドについては重点的に警備が行われているが、その他の遺跡については管理人がいるだけであり、遺跡とそうでない地域を分ける境界も不明瞭で、耕地際から簡単に入ることができる。ダハシュールの南地区に至っては、古王国時代、中王国時代の広大な墓域になっているが、その重要性が理解されていないためか、遺跡の警備が行われておらず、管理人も不在の状況が続いている。ダハシュールの南地区は、耕地際にかつて湖が広がっていたこともあり、遺跡は現代の人々が居住している地域からやや離れており、人気がないことも盗掘の被害を助長する結果となっていると考えられる。

以上、ダハシュールおよびマズグーナの遺跡群の現状と問題点について見てきた。この地域の遺跡整備は古王国時代の2基のピラミッドに重点が置かれており、ピラミッドの周辺施設や、中王国時代のピラミッド、古王国時代・中王国時代のmastaba墓、シャフト墓群などはあまり考慮されておらず、近年は盗掘の被害も進んでいる。たしかに、古王国時代の2つのピラミッドはエジプト学史上でも特に重要であり、また観光資源としても大いに魅力がある。しかし、緑地からピラミッドに至る広大な空間的広がりを持つ遺跡の構成やその発展過程、現代においては稀有な遺跡景観など、遺跡の持つ意義・重要性が、十分に伝え切れておらず、多くの重要な遺跡が今まさに失われようとしている。

3. 保存整備計画の方向性

ダハシュールおよびマズグーナの遺跡の現状と問題点を踏まえながら、この地域の遺跡が失われることなく後世に継承され、これらの遺跡が持つ重要性を総合的に理解できるような保存整備計画が求められる。以下に、保存整備計画の方向性について述べる。

(1) 構成される遺構の関連性を考慮した整備

ダハシュールおよびマズグーナは古王国時代、中王国時代に墓として重点的に利用され、その後大規模な建設活動が行われていない。そのため、参道や河岸神殿を含めたピラミッド複合体、ピラミッド周辺に広がるmastaba墓、土壌墓などの、同時代の一連の構成が良好な状態で保存されているという特徴がある。また、古王国時代のピラミッドの発展過程を示すスネフェル王の2基のピラミッドや、中王国時代に作られたピラミッド群、および両者の葬祭複合体は、2つの時代の特徴を対比的に観察し、理解する上で優れた構成と言える。こ

うした特徴を活かし、構成される遺跡・遺構の関連性を考慮する形で、当該地域の遺跡が持つ重要性を伝えることが基本方針となる。

例えば、スネフェル王の屈折ピラミッドは、ピラミッド本体だけでなく、参道の存在も明示し、河岸神殿も積極的に公開することで、ピラミッド複合体の全体構成を理解しやすい形にする。アメンエムハト3世のピラミッドは現在公開されていないが、ピラミッド複合体全体を目に見える形で整備し、これまでの研究によって得られた、ピラミッドでの祭祀活動やそれを維持するための諸活動も含めて情報を提供できるようにすると良いだろう。また古王国時代と中王国時代のピラミッド複合体がどのように異なるかを比較し、ピラミッド史の遡上に置くことで、より深くピラミッドを理解することができる。また、同時代の高官墓群も、調査が完了したものに 대해서는積極的に公開し、埋葬習慣から当時の社会構造を認識できるような構成にするなどが考えられる。

(2) ゾーニング規制の確立と各ゾーンの整備方針

世界遺産登録時点でのメンフィス・ネクロポリスの遺産の登録範囲は大まかなものであり、耕地際の遺跡やダハシュール湖が入っていないなどの問題がある。メンフィス・ネクロポリスの広域な線引きだけでなく、ダハシュールおよびマズグーナ地域に限定した、詳細なゾーニングを確立し、積極的に公開していく場所と保護と調査研究に重点を置く地域などに分け、効果的な遺産のマネジメントを目指す。また第2章でも言及されているように、ゾーニングを確立し、近隣の住民達にも分かるように明示し、侵入を規制することで、近年の深刻な盗掘被害や、度重なる遺跡エリア侵入に伴う遺跡破壊を軽減することができる。

例えば、次のような方針が考えられる。ダハシュール中央地区（赤ピラミッドからアメンエムハト3世のピラミッドまで）はスネフェル王の2つのピラミッドがすでに公開されており、その他の遺跡も調査が他地域よりも比較的進んでいる。また古王国時代と中王国時代の代表的な遺跡がこの地域に集まっており、ダハシュールおよびマズグーナ地域の遺跡の特徴が理解しやすいため、この地域を公開ゾーンに設定し、公開に向けた整備計画を重点的に実施する。そしてダハシュール北地区と南地区・マズグーナは、調査・研究を重点的に行う地域として、研究の進展に即して段階的に公開への道筋を模索していくゾーンとする。ダハシュール南地区およびマズグーナは、中でも調査が進んでいない地域であり、近年の盗掘の横行によって大きなダメージを受けている。盗掘され、放置されている遺構のサルベージとして今後大々的な調査が必要となるだろう。古王国・中王国時代のマスタバ墓、シャフト墓や中王国時代のピラミッド群は十分に調査されているとは言えないため、発掘調査を通して遺構の年代、所有者や性格を明らかにし、遺跡の特徴を良く理解した上で、整備の方針を具体的に決めていくというプロセスが求められる。

前述のように、赤ピラミッドの東側の耕地にはピラミッド・タウンが存在していたことが知られている。ダハシュール湖では衛星画像の解析によって地形を改変していたことが明らかになった。こうした耕地側の遺構も保護の対象とするため、ゾーニングの東際は砂漠と緑地の境界ではなく、緑地で確認された遺構を含む形で、やや東側に設定して緑地を含める。ゾーニング内では耕地としての利用を停止し、古代の景観に近い形へ改変する。水辺も含めてピラミッド複合体の保存整備を実施することで、当時の葬祭の儀式や各遺構の構成・役割を、見る者が認識しやすく、より古代の遺跡景観に近い姿での再現を目指す。

また遺跡ゾーンの外側には一定幅のバッファゾーンを設け、耕地としての利用を停止し、駐車場や休憩施設、トイレ、飲食店、土産物店など、観光に関連する施設のみを配置する。バッファゾーンでは建物の高さ

の制限や、過度に目立つ色・デザインは避けるなどの規制を設ける。

(3) 遺跡景観の保護と改変

ダハシュールはピラミッドのような大規模なモニュメントを有するだけでなく、ダハシュール湖の存在や耕地際の開発も限られていることから、古代の景観を良くとどめていると考えられる。遺跡景観も保護の対象とするとともに、景観を阻害する要素は積極的に改変していく。

遺跡ゾーンの境界には防護柵を設け、近隣の住民が観光目的以外で容易に侵入できないようにする必要があるが、一方で、遺跡景観の保護という点から、防護柵は景観を著しく害するようなものであってはならない。緑地で確認された遺構も含めたゾーニングとなるため、東側の境界は緑地帯に設定されることになる。防護柵は緑地に繁茂する草木に溶け込むような色・デザインを考案し、高さについては人が容易に乗り越えられないが極度に目立つことがないように、最適な値を模索する必要がある。

またダハシュール湖は近年枯渇してしまっているが、より古代の景観に近づけるために湖に水を入れることも考慮に入れるべきである。

(4) 観光ルートの再考

現在のダハシュールへの観光ルートは、ミンシャート・ダハシュールを通る幹線道路から西へ折れ、赤ピラミッドの北側を東西に走る道路へつながる道を通る。途中、耕地際のところにチケット・オフィスがあり、チケットを購入してから遺跡に入る。観光客のタクシーやバスは赤ピラミッドの北側にある平坦な場所に駐車し、屈折ピラミッドへ行く場合はタクシーやバスに乗って移動する。

赤ピラミッドの北側を通る道は西の軍事エリアにつながっているため、軍隊の車両も同じ道も利用する。軍隊の車両は戦車を積んだトラックなど、特に重量が大きいものが多く、観光用の大型バスも含めて、車両の通過による振動が道の近隣にある遺跡（赤ピラミッド、Lepsius 50 や古王国時代の墓が確認されている）へ悪影響を与えている可能性がある。少なくとも軍隊の車両に関しては、ダハシュールからの軍事エリアへの通行は避け、ギザからファイユームへつながるファイユーム道路へ一本化することが望ましいだろう。

遺跡エリアへの車両の進入はなるべく避けるべきであり、またダハシュールの優れた特徴である景観や、保存状況が良好な葬祭複合体の構成を体験すると言う意味では、緑地側からのアプローチが望ましい。緑地側の遺跡エリアの外に駐車場を設け、屈折ピラミッドやマスタバ墓群へは屈折ピラミッドの河岸神殿経由でアプローチし、アメンエムハト3世はピラミッド複合体から参道を通して至るという道筋が考えられる。

一方で、お年寄りや足の不自由な人々のために、簡単に遺跡にアプローチできる経路も必要だろう。例えば、観光用の電気自動車を利用し、現在使用している道を通して耕地際の駐車場と赤ピラミッド周辺を往復させるルートが考えられる。現在の観光用の道路は、観光用の電気自動車の往復、遺跡整備のための資材搬入・搬出路、緊急時の退出路に限定することが望ましい。

(5) 博物館と便益施設

現在ダハシュール地域には博物館はなく、この遺跡から出土した遺物を見るためにはカイロのエジプト考古学博物館に行かなければいけない。しかし、観光客が遺跡の重要性への理解を深めるためには、遺構だけでなく出土した遺物を含めて遺跡を総合的に把握することが肝心であり、そのためには出土した遺跡に隣接する場

所で、遺跡の公開計画と連動した遺物展示構成にする方が効果的であり、博物館の建設を検討すべきである。

便益施設では、遺跡への影響や景観への配慮から、最低限のもののみ遺跡側に設置する。トイレ、休憩施設などは遺跡周辺にも必要であり、例えば遺構が存在しないことが調査によって明らかな場所の地下に設けるなど、遺跡景観に配慮した設計とする。それ以外の駐車場や土産品の店舗、休憩施設と付属するトイレ、飲食店などはバッファゾーンに設ける。

(6) 遺跡の情報表示

現状では公開対象となっている遺構でさえもほとんど説明表示がない状況であるため、観光ガイドを雇う、もしくはガイドブックを観光客が自前で用意しない限り、遺跡の性格を理解することは難しい。遺跡の情報表示の充実が求められるが、過度の看板の乱立は景観を害する結果となるため、その分量やデザインを考慮し、遠目には目立たないものにするか、看板とは別の情報表示の方法(cf. 附録 1, 2)を取り入れる必要があるだろう。また、遺跡に関する情報が様々な種類の言語で書かれたリーフレットを作成し、観光客がチケット・オフィスでチケットを購入した際に配布するという方策も考えられる。遺跡の看板は大きさの問題から多数の言語に対応することは難しいため、リーフレットを併用する方法は多言語対応という点からも有効である。

(7) 調査・研究の継続と保存整備へのフィードバック

当該地域にはまだ数多くの遺構・遺物が埋蔵されており、今後も調査・研究が継続される。これらの成果によって得られた知見から、遺跡の修復・復元整備や情報表示などに対して、修正が迫られることも十分考えられる。修正に対して柔軟な対応が図られるとともに、積極的に調査・研究を行い、修復・復元や保存整備における真実性を高めていく。

(8) 持続可能な運営のための体制作り

遺跡の保存整備の仕組みを維持・継続し、新しい知見や状況の変化に対して適宜対応していく体制を構築することが望まれる。

遺跡の劣化状況、保護柵、看板等の情報表示、トイレや休憩施設などの便益施設の状況、周辺環境の変化を定期的にモニタリングする制度が設けられるべきであり、そのためのスタッフを準備し、養成する。博物館の展示構成や遺跡における情報表示、配布用のリーフレットは調査・研究の進展に応じてアップデートしていく。博物館の展示においては、何らかのテーマを設定した企画展や、新しい発見の成果を早い段階でクローズアップできるような企画があってもよい。来る度に新しい情報が得られるような仕組みを作ることで、リピーターを生むことが期待できるだろう。

4. まとめ

ダハシュールおよびマズグーナは広大な土地に古王国・中王国時代のピラミッドを中心とする葬祭複合体とそれを取り巻く様々な社会階層の墓が良好な状態で残っており、また優れた遺跡景観を持つという特徴がある。現在はスネフェル王の2つのピラミッド本体のみが整備の中心となっており、この遺跡の優れた特徴や古代エジプト文明におけるその重要性が十分に伝えられる形になっていない。2つのピラミッドだけでなく、周辺の

葬祭複合体も含め、遺構間の関係がわかりやすい整備を目指すことや、古王国時代だけでなく中王国時代も含めた遺跡整備によって、遺跡の歴史の変遷や空間的な広がりを認識しやすい整備にすることが求められる。

当該地域内で、積極的に公開する地域と、調査・研究や保護を優先する地域を分割するゾーニングを実施し、遺産のマネジメントを効果的に行っていく体制を整える。またゾーニングは緑地側で発見された遺構も含め、侵入を規制する措置を行うことで、2011年1月以降大きな問題となっている盗掘の進行へ対処する。

その他、遺跡景観に与える影響も考慮しながら、博物館や便益施設、遺跡の情報表示を充実していく必要がある。そして、これらの遺跡整備が維持され、継続的に運営されていくためのシステム、スタッフ養成を進めることが望まれる。

註

- 1) 早稲田大学によるダハシュール北遺跡の第13次調査までの主要な参考文献は、エジプト学研究別冊第15号の「Ⅰ. はじめに」の註にまとめられている(吉村 2011: 14)。以降の調査については、第14次概報(吉村、近藤、長谷川他 2011)、第15次概報(吉村、近藤、矢澤他 2011)、第16次・第17次概報(吉村、矢澤、近藤他 2012)、第18次概報(吉村、矢澤、近藤他 2013)を参照。
- 2) ダハシュール南地区の中王国時代のピラミッド群についてはDi. アーノルドとR. シュタデルマンによる報告(Arnold and Stadelmann 1975: 172, 174, Abb.3)、R. シュタデルマンとN. アレクザニアンとによる報告(Alexanian and Stadelmann 1998: 312-313)を参照。第13王朝という年代が与えられている。
- 3) この遺跡から2人の名前が確認されたわけではなく、地下の構造の形式から12王朝末のものと推測されている(Lehner 1997: 184-185)。発掘はW.M.F. ピートリによって実施された(Petrie 1912)。
- 4) Cf. アハラム紙電子版(ahram online)2013年1月13日記事。“Egypt's Dahshur ancient heritage under immediate threat” <http://english.ahram.org.eg/NewsContent/9/40/62323/Heritage/Ancient-Egypt/Egypt-Dahshur-ancient-heritage-under-immediate-th.aspx>